

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Infantile peanut introduction and peanut allergy in regions with a low prevalence of peanut allergy: the Japan Environment and Children's Study (JECS)

和文タイトル:

乳児期のピーナッツ摂取とピーナッツアレルギーの関連: エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 甲信ユニットセンター(山梨)

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Journal of Epidemiology

年: 2023 DOI: org/10.2188/jea.JE20230210

筆頭著者名: 小島 令嗣

所属 UC 名: 甲信ユニットセンター(山梨)

目的:

ピーナッツアレルギーの有病率の高い地域では、乳児期早期のピーナッツ導入はピーナッツアレルギー発症予防になると考えられている。しかし日本を含むピーナッツアレルギーの有病率の低い地域では、その研究が乏しいため、乳児期のピーナッツ導入とピーナッツアレルギー発症の関連を明らかにすることを目的とした。

方法:

エコチル調査に参加した 74,240 名の子どもの 4 歳時までのデータを解析した。子どものピーナッツ摂取については養育者の質問票について把握し、12 ヶ月以内の摂取開始を乳児期のピーナッツ導入と定義した。乳児期のピーナッツ導入と 4 歳時のピーナッツアレルギーの関連を多変量ロジスティック解析で解析した。

結果:

乳児期のピーナッツ導入は 4.9%であり、4 歳時のピーナッツアレルギーの有病率は 0.2%であった。乳児期のピーナッツ導入があった子どもは、なかった子どもと比べてピーナッツアレルギーが少なかったが、統計的な有意差はなかった。

考察(研究の限界を含める):

今回の結果は、ピーナッツアレルギーの有病率の低いアジアからの先行研究の結果と一致していた。研究の限界として、ピーナッツアレルギーや乳児期のピーナッツ導入が養育者の報告であること、乳児期のピーナッツ導入後のピーナッツ摂取量が調べられていないことなどがあげられる。

結論:

4 歳時のピーナッツアレルギーの有病率は 0.2%であった。乳児期のピーナッツ導入のピーナッツアレルギー発症への予防効果は明らかではなかった。